

『世界の大都市—その行政と政治と計画』

Great Cities of the World—Their Government, Politics and Planning

ウィリアム・A・ロブソン [編著]、蠟山政道 [日本版監修]

1958年／菊判／916頁／図書番号 OA-2415

ウィリアム・A・ロブソン・ロンドン大学教授は、*The Government and Misgovernment of London*(1939年)を著したことを機に、世界の大都市行政・大都市問題の研究書の必要を感じていた。第二次世界大戦後、ロブソンは各国の研究者に寄稿を依頼し、大都市問題の比較研究をめざして本書を編纂した。

1954年の初版では日本の都市が取り上げられていない。1955年の国際政治学会議の際、蠟山政道・お茶の水大学学長はそのことをロブソンに話した。南アフリカ、ドイツ、日本の都市を欠いていることを気にかけていたロブソンは、蠟山に第2版で日本の都市について執筆するよう求め、日本語への翻訳も承諾した。蠟山は57年の第2版で「東京と大阪」を執筆している。日本語版は蠟山が監修し、小倉庫次・東京都立大学教授、辻清明・東京大学教授、吉富重夫・大阪市立大学教授が翻訳、東京市政調査会が発行した。

第1部はロブソンが「今日の大都市」として都市論を展開し、世界の大都市で人口の増大・集中による都市膨張の問題やインフラの不足などの問題が起こっていることを指摘している。

制度面では、大都市はしばしば特徴的な制度、中央政府との特徴的な関係をもつとした上で、執行機関の型による5分類を示す。①議会が執行権を有し、行政を指揮監督(ロンドン県議会など)、②市議会が執行機関を選任(モスクワ、モンリオールなど)、③公選市長(ニューヨークなど)、④公選の委員会(トロントなど)、⑤中央政府の任命による執行機関(パリなど)の5つである。

そして、都市の行政事務、財政、計画などを分析した上で、大都市が直面する共通の問題を、①区域と行政機関の組織、②市民の関心と民主的関与、③都市的サービスの能率、④財政、⑤首都地域の計画、の5つに分類している。

①は「人口、面積、社会・経済生活の実態に即応する大都市の制度の枠をどう展開するか」ということであり、行政域を超えて広がる大都市において、サービス・都市計画の統一性と地域のきめ細かな管理を両立させるためには、「より大きな区域と機関、より小さな区域と機関」が必要だとする。また、②では大都市市民のコミュニティ意識の希薄化、③では都市サービスの水準や配分の問題、④では財源不足などを指摘し、⑤では大都市の困難な問題は「遠大な創造的な計画によってはじめて解決できる」としている。

第2部は、各都市の記述である。アムステルダム、ボンベイ(現ムンバイ)とカルカタ、ブエノスアイレス、シカゴ、コペンハーゲン、ロンドン、ロサンゼルス、マンチェスター、モンリオールとトロント、モスクワ、ニューヨーク、パリ、リオデジャネイロ、ローマ、ストックホルム、シドニー、ウェリントン、チューリッヒ、第2版で追補されたケルン、ヨハネスブルグ、東京と大阪の24都市について、各研究者が、法的制度に止まらず、議会、行財政、政治、都市サービス、都市構造、都市計画、国家との関係を描いている。20世紀半ばに編まれたものではあるが、世界各国の各都市が大都市問題に対処する制度・行政・計画を模索してきた過程がわかる貴重な資料である。

(中嶋いづみ・市政専門図書館企画調査室主幹)